

ビビるビビリの豆ハート

金原 久美子

私は超ビビリの豆ハート。

朝は特に小粒の心臓。今日の予定を思いながら、
テレビの占いをチェック。

あー。最下位はふたご座のあなた。今日の予定
はどんなだったかな。やばい、今日は大事な会議

がある。どうしよー。お腹痛くなってきたとか言
って休むか。無理だな。とにかく、控えめにする
しかないな。でも、そんなあなたを助けるラッキ
ー。パーソンは、眉毛の濃い人。あれー誰かいるっ
け？ あ、よしよし、会議のメンバーに眉毛の濃
い先輩がいる。大丈夫。なんとかなるはず。先輩
お願いします。最低限のダメージですみますよー
に。あー、そうこうしてたら遅刻しそー。みたい

な感じの一日。気になって、大事な事は先延ばしして、何もかもにビクビクしてしまうブルーな一日となるのです。

本番前も超小粒の豆心臓。ここぞのイベントが迫ると、急にそのイベントの日になってしまった恐ろしい夢を見てしまう。アレ？ まだそこ確認してなかったのにどうしょー、って夢。めっちゃくちや誰かに責められる夢。そしてその夢は目覚め

てからもしつかりと憶えていて、恐怖心を抱えながら、イベント当日がやってきてしまうのです。

そんなビビりに、朗報が。

ビビリの人の心を落ち着かせる特効薬が開発されたのだ。残念な占いを見た後に飲むと、あら不思議。占いなんてまったく気にならなくなってしまう。大事なイベントが近づいたときに飲むと、あら不思議。心配ごとが気にならなくなってしまう。

う。

ただし、副作用にご用心。

ビビリが消えすぎて態度が悪化。心が大きくなりすぎて失敗する恐れがあります。また、不安が消えすぎてイベントそのものを忘れてしまう恐れがあります。

ビビリたちは、そんな副作用が心配で、薬を飲むことが恐ろしくて、せつかくの薬は広まってい

くことはなかったのです。

江戸、春に曇天

芽論 総太

江戸の頃の話である。

明日からようやく春だというのに、外はいまだに銀世界が広がっていた。しんしんと雪が積もり、そこかしこに草鞋の足跡が転々としている。あまりの冷たさに、三郎は身震いをした。先代の領主

に「都よりはマシじや、長崎は雪も降らぬ」と言われていたことを思い出し、このやろう、と白い息を吐く。

買ったばかりの鍋用の鮎を片手に道を行くと、傍らの民家からばらばらと大豆が飛んできた。見れば、小童が升いっぱい大豆を積んで、振りかぶっている。

「鬼は外ー！」

「痛っ、おい、こら！」

「あはは！」

三郎が鬼の形相で凄むと、小童はけらけらと笑つて家の奥へ引つ込んだ。てやんでい、年越しだからってどいつもこいつも浮かれてやがる。

明日から曆上の春、立春である。立春をもつて年が明け、その前日の大晦日を節分と呼んでいる。この頃になると一年の厄を落とすために、大勢の

家で豆まきが行われた。去年は水害が多く作物が
実らなかつたため、軒先に転がる豆が多い。水害
だけではない。地鳴りや落雷も多かつた。その度
に人々は「鬼の仕業だ！」と逃げ惑う。牛の角と
虎の牙を持つ鬼は、去年も随分と田畑や海を荒ら
してくれた。ちくしょう、と農民の悲痛な声が豆
まきに乗って聞こえてくる。

三郎は外まで飛んでくる豆を器用に手で掬い、

袖に入れた。ボリボリと齧りながら、しばし考える。農民が倒れば幕府が倒れる。税、という形で徴収している以上、農民を災害から守ることも三郎ら官職の役目であるのだ。

凍える指先で戸を引き、無事に家へ着いた。寒空の下で振り回していたせいか、鮎はすっかり凍っている。外行きの羽織を下ろした途端、ぱらぱらと大豆が転がった。どうやらかなり襟か袖かに

溜まっていたらしい。

家康公より二百数年、日ノ本は大きな戦もなく泰平の世であった。しかし平和が崩れないとも限らない。

三郎は無心で豆を食べ続けた。解決の糸口は見つからない。